

「日本人家族と国際結婚家族における高齢者介護に関する比較研究」

竹田美知

1. テーマの社会的背景

人口の高齢化は、将来日本の労働力の需要・供給に大きな影響を及ぼすことが予測されている。それは若年労働力の不足によって、年金を支える社会保険料や税収が減ることによって高齢者の生活の経済生活の基盤が揺るぐだけでなく、看護・介護労働力不足によって高齢者の健康で、精神的に安定した生活すなわち社会生活の基盤が揺るぐことが問題である。

2000年4月から「介護保険制度」が整備され、介護の費用負担や介護サービスの提供に社会保険方式で対応するシステムが整備された。また1995年に成立した「高齢社会対策基本法」は、介護労働力の第1の担い手を家族と捉えていた視点を変換し、在宅介護の担い手をして公的サービス、民間サービス、地域やN.P.O、ボランティアなどのサービスを混合する視点を導入した。この介護保険制度により、介護認定審査会の審査を経て介護サービス計画がたてられ家族中心の介護から、介護者が選択できる選択的サービスが可能になったといわれている。しかし実際は介護保険の範囲を超える介護負担を敬遠することや、また気心の知れた家族による介護を選択した結果からか、家族の介護負担はいっこうに軽減しないというのが現実である。

「平成10年国民生活基礎調査」によると、要介護高齢者の家族との同居率は、85.7%、別居率は14.3%で、家族と同居して介護をうける高齢者の率は高い。さらに、同居の要介護者に対する主な介護者を調べると、配偶者が36.8%、子の配偶者が33.8%、子は26.2%という数字からしても、家族が高齢者介護の主たる担い手であることはこの数字をみても明らかである。また別居の場合でも、子と子の配偶者、その他の親族が介護をしている場合が42.0%と高く、日本の高齢者介護は同居、別居を問わず、家族に依存していることがわかる。

今後第二次大戦後生まれた第1次ベビーブーム世代が高齢期に入ると、一層高齢化に拍車がかかるといわれている。この世代は高度成長期に大都市圏で就職・結婚をした世代であり、一家族あたりの子どもの人数は二人程度というようにそれ以前の世代と比較して少子化した家族とされている。この世代の親は子どもの世代の家族と別居し、すでに高齢者の仲間入りを果たしている。またこの第1次ベビーブームの世代は親を介護しつつ、自らも高齢化していく初めての大型老々介護世代といえよう。そして彼らの子ども達はパラサ

イトシングルと呼ばれ、すでに彼らの親の世代では自立を果たしていた年齢でありながら、親に経済的にも精神的にも依存している世代といわれている。このようにベビーブーム世代のライフサイクルは、子どもたちの結婚も遅く、その晩婚であることから、末子が大学卒業とかれらの退職の時期がほぼ重なり、子の経済的自立前の時期に、親の介護も重なるという二重の経済的負担が生じるライフコースが予測される。また子がシングルで過ごすことも多く、親に介護が必要となっても、子が家族を形成していないがゆえに介護労働力を家族に期待できないという現象も見られる。

すでにこれらの現象が都市部に先んじて起こっているのは、東北や北陸地方の農村部であるといっていいただろう。高齢化に進展と若年労働力不足は、村全体の問題として大きく取り上げられている。その結果、まずは若者の村離れ防止と家族形成を助けるためにと、村総出で花嫁募集をするところも出現した。兼業や季節労働という都市部の女性が敬遠するような家業ゆえに、すでに嫁不足は深刻化していた。今回農村部で調査対象地域として選択した「山形県最上圏域」も過疎化が進み、このような農業の後継者不足に悩む地域であり、役場を通じての花嫁募集の先駆的地域であった。後述するが、外国人花嫁は、この地域で2023人（平成11年）に上っている。一方都市部でも外国人花嫁は観光や労働などを機会として日本を訪れ、日本人男性と出会って結婚するケースが増加している。バブル崩壊後も、零細な中小企業を支える安価な労働力供給源としての外国人労働力の受け入れは、家族の国際化も促進している。農村部と都市部とその経済的・地理的背景にそれぞれ特色があるものの、バブル崩壊後の地域の産業の労働力、家族の介護・育児労働力の担い手として、地域における外国人配偶者が期待され、国際結婚が一役を担っていることには変わりはないのである。高度成長期の最終段階であったバブル経済期に安価な労働力として受け入れられ来日した外国人男性労働者は、バブルが去り長引く不況の中でも日本に滞在し、本国に仕送りを続けている。それから10年、少子・高齢化社会の問題が取りざたされ、個人の配偶者選択や結婚、高齢者福祉の問題が深刻になるに従って、サービス労働者、家事労働者として外国人女性労働者が、結婚という制度のもとに、ジェンダーバイアスのかかった家族内無償労働の担い手として期待され、受け入れられ始めている。

2. 研究の手続き

本研究では、まず国際結婚をした家族にとって「親の介護」をどのように認識しているかを、「国際結婚を考える会」の協力を得てアンケート調査を企画した。

次に「国際結婚における親の介護」の実態を明らかにするために農村部において実際に高齢者介護にたずさわった家族1件、都市部において高齢者介護にたずさわった家族1件からインタビュー調査を行った。このインタビュー調査に先立ち調査地域の特徴を理解するためにこれらの家族が住む地域の人口構造や自治体の社会福祉施策を調査し、家族が持

つ地域的介護資源がどのように整備されているかを明らかにする調査地域のマクロ統計資料を収集した。

インタビュー記録から農村部、都市部の国際結婚家族の介護体験から語られた諸問題をとらえる。その問題が個人の語学力や文化習慣の違いから生じているのか、家族関係の閉鎖性や家族・親族の援助のあり方に起因しているのかを分析する。比較ケースとして大阪市内に在住する3世代日本人家族の介護ケースを比較対照しながら国際結婚であるがゆえに起こる諸問題と、一般に介護にかかわる問題とを峻別し分析したい。

3. 調査の流れ

5月から6月にかけて、農村部における外国人花嫁の調査を10年前から継続してきた共立女子短期大学、松岡明子教授および植木武教授とともに農村部のインタビュー調査の面接質問表を作成した。8月末から9月初めにかけてインタビュー調査の調査対象地域となった最上圏域の産業、人口、結婚状況などのマクロな資料を作成し、9月にインタビュー調査を実施した。10月からは、国際結婚家族の介護に対する意識を明らかにするアンケート調査の質問表を作成し、「国際結婚を考える会」に依頼して、アンケート文チェックを行った。11月から12月にかけてインタビュー調査のテープ起し作業に入り、分析を進めた。さらに1月にアンケートを配布し、郵送調査を行った。2月に回収し、328票配布して141票を回収した。3月にアンケート調査結果を分析した。

4. 調査結果

4-1 国際結婚家族における親の介護についてのアンケート調査結果

【調査対象者の属性】

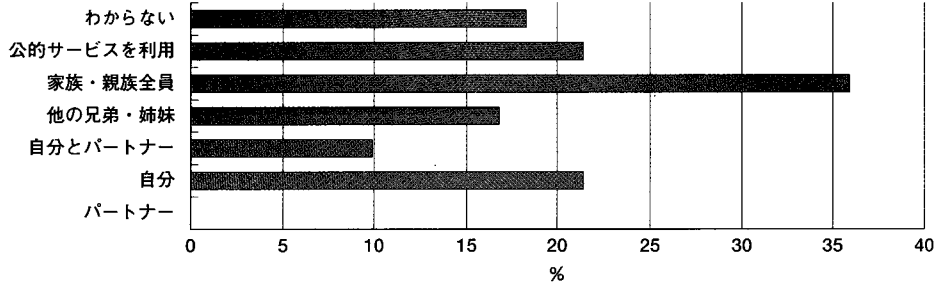
今回の調査対象者は、日本人の妻と外国人の夫の組み合わせが多く、夫の国籍もアメリカやヨーロッパなどが約半数と欧米諸国の出身者が多いこともこの調査の結果に大きく影響している。回答者本人およびパートナーの年齢は、35歳から39歳が一番多く、親の年齢はこれからちょうど高齢期にさしかかろうとしている年代と言えよう。

【介護に対する意識】

回答者本人の親が日本に在住している場合がほとんどであったので、本人の親の介護適任者は、家族・親族全員とあげたケースが一番多く（35.9%）、ついで、本人自身（21.4%）と公的サービス（21.4%）と続いている。国際結婚したパートナーを上げた人は、まったくいなかった。

表1 本人の親の介護資源

- パートナー 0% ● 自分 21.4% ● 自分とパートナー 9.9% ● 他の兄弟・姉妹 16.8%
- 家族・親族全員 35.9% ● 公的サービスを利用 21.4% ● わからない 18.3%

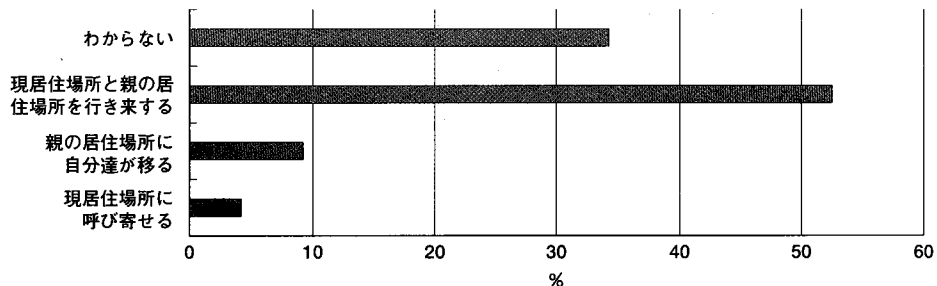


妻のほとんどが日本人であったことが、このような結果に大きな影響を与えていると思われる。前述した介護者調査では、妻や嫁が高順位にあげられていることを考えると、家族・親族全員という答えは、介護を家族の特定の一人の肩に背負わせることを回避し家族全員で介護を支える姿勢が見られる。介護に自分の役割を自覚しながらも、公的サービスを期待する声は多い。

介護の場所は、「わからない」と現実に処遇して判断するという人が多い(34.2%)が、自分達が住んでいる場所と親の居住する場所を行き来する人が半数以上いること(52.5%)も見逃せない。介護が必要であるから、一方を呼び寄せて介護するという「定住」方式ではなく、「移動」しながら介護をする方式が選ばれたのは、興味深い。

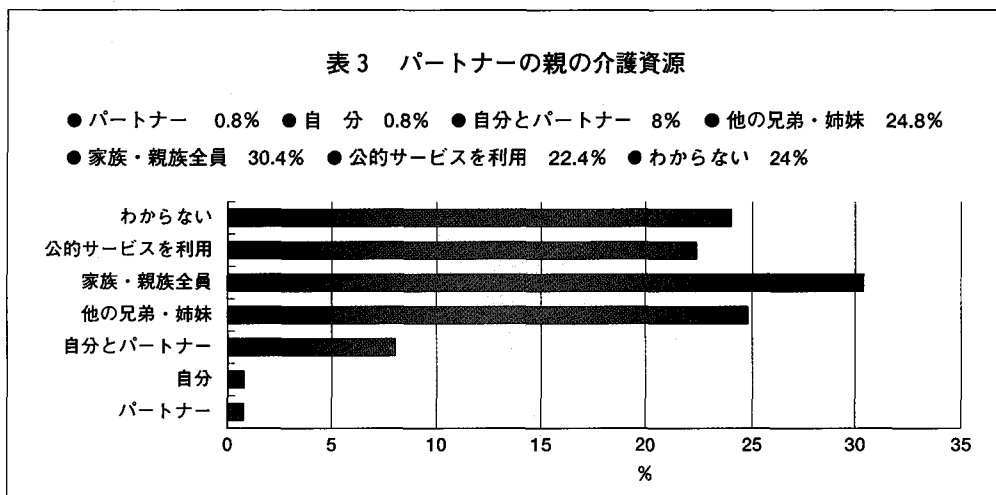
表2 本人の親の介護場所

- 現居住場所に呼び寄せる 4.2% ● 親の居住場所に自分達に移る 9.2%
- 現居住場所と親の居住場所を行き来する 52.5% ● わからない 34.2%

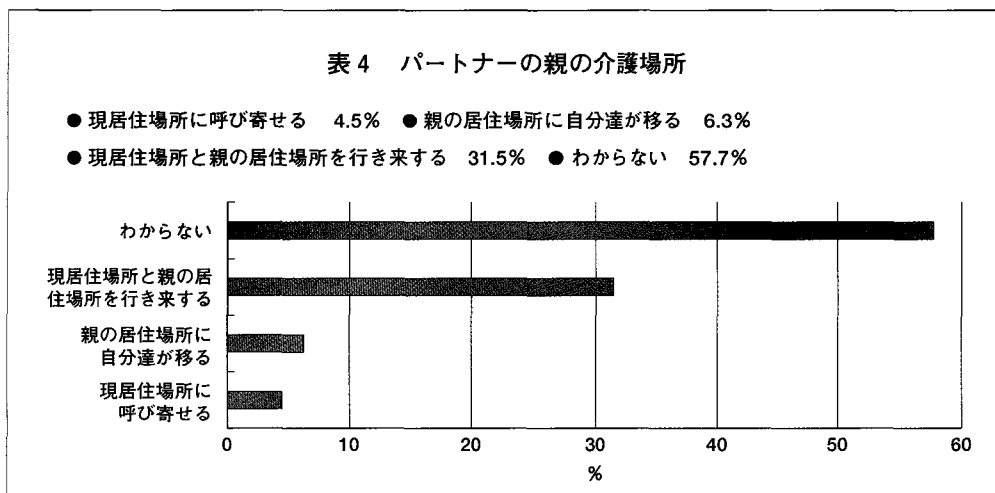


一方、今回のアンケート調査では外国人の夫を持つケースが多いわけだが、外国人であるパートナーの親の介護担当者は、やはり家族・親族全員を30.4%の人が上げている。しかし次にあげられたのは他の兄弟・姉妹であり(24.8%)、外国に住む自分達をあげた者は

10%に満たない。公的サービス利用は、22.4%と、外国にいる義母・義父の介護は、全員で介護が前提といいながらも実際の介護は他の兄弟・姉妹、公的サービスに頼らざるを得ない状態が見えてくる。

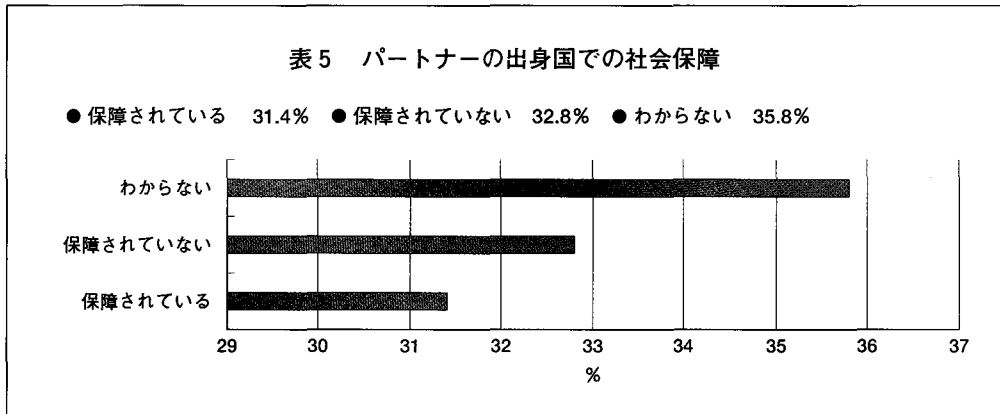


もちろんこれらの背景には、ビザの問題がある。2つ以上国籍を持っている人は3.6%にすぎず、親の介護のため渡航してもビザの関係上、行ったり、来たりが余儀なくされている状態である。渡航回数は1年に1回が41.7%と頻繁なものも、親の介護が必要であっても長期間滞在できない事情も反映している。だからこそ、外国に住むパートナーの親の介護の方法については「わからない」と答えた者が57.7%と半数以上を占め、介護の場所に迷いがみられる。「現住所と親の住所と行き来する」と答える者31.5%は、外国との行き来を前提にしているわけだから、その費用、時間、労力が相当かかることが覚悟している。



さらに国際結婚をした彼らが歳を重ねたとき、頼みになる「社会保障上の権利」についても質問した。「わからない」と答えた者が35.8%、「保障されていない」32.8%とここにも、

国籍の問題が立ちはだかる。



4-2 国際結婚をした人達の介護意識に影響している要因

外国の居住年数×パートナーの親の介護担当者

外国で居住している年数が5年以下の人と6年以上の人とを比較してみると、外国人である夫の親の介護は、外国歴が長い人ほど、公的サービスを利用するという人が多い（自由度4 有意差水準 $p<0.05$ ）

来日後の生活状況の変化×パートナーの親の介護担当者

来日後、生活が苦しくなった人ほど、出身国の家族や親族に頼るといふ人が多く、来日後豊かになった人ほど、公的サービスを利用すると答えた人が多い。日本から仕送りをして老親の介護を公的サービスに委ね責任をはたそうとする姿勢がみられる（自由度12 有意水準 $p<0.01$ ）

外国居住年数×本人の親の介護担当者

外国で居住している年数が5年以下の人と6年以上の人とを比較してみると、居住年数が長いほど、他の兄弟姉妹に親の介護を期待する人が多く、現在は日本に住んでいるが長い外国生活の中で介護を他の兄弟にゆだねる価値観ができあがったと思われる（自由度6 有意水準 $p<0.01$ ）。

外国居住経験×パートナーの親の介護担当者

外国居住経験がある者ほど、公的サービスを外国に住むパートナーの親の介護先を選ぶ者が多く、自分達夫婦を介護資源とみなしていない者が多い（自由度4 有意水準 $p<0.05$ ）

以上の結果から、外国居住歴と経済的な条件によって、介護資源が規定されていると思われる。

4-3 農村部インタビュー調査地域の特色

今回、農村部の国際結婚の調査対象地域として選んだ最上広域は、昭和30年に128,597人

のピーク人口から減少の一途をたどる「過疎地域自立促進特別措置法上」の過疎地域に指定されている。生産年齢人口比は60.6%で、65歳以上の高齢人口比率は、23.6%と高齢化が進行した地域である。

また平成12年度国勢調査から最上圏域の男女別人口をそれぞれの年齢別に集計すると、50代年齢層まで男子の割合が高く、60代からは反転して女子の割合が高くなっている。そのような状況を反映して、最上地区の外国人配偶者（妻）は平成11年12月現在361人で人口比0.30%である。外国人配偶者（妻）の在留資格は、「日本人の配偶者等」が72.9%、「永住権」の在留者が22.4%、帰化者が4.7%となっている。

最上広域市町村事務組合の平成13年度国際交流センターの概要による『外国籍婦人の帰化者が漸増するとともに、特に平成9年を境として、外国人婦人が「日本人配偶者等」から「永住者」へ在留資格の変更を行う傾向が顕著となっているのが本地域の特徴となっている』と記述されており、国際結婚をして年月を経るにしたがって、外国籍を捨て日本国籍を取得する傾向がみられる。

また外国人登録者数も最上郡全体で582人と多く、就学が34人、留学が29人、研修が22人、興行55人、特定活動40人と外国人配偶者以外の外国籍の住民の増加も顕著となっている。

外国人配偶者（妻）の国籍は韓国または朝鮮130人、中国144人、フィリッピン67人と東南アジアからの配偶者（妻）が多く。最近急増しているのは中国、韓国・朝鮮からの配偶者である。

国際交流センターの機関紙によると、このような外国人花嫁による自主活動団体は、FWAM、太陽の道といったフリッピン花嫁によって組織されたもの、アジューマの会のような韓国からの花嫁によって組織されたものなど多岐にわたる。中でも日韓友好の村「高麗館」は、戸沢村の特産物としてキムチやビビンバを産出し、韓国食文化と日本の食文化の交流として村おこしにも一役かっている。

また地方公共団体側も、外国人婦人の初期日本生活のケアに力をいれ、日本語教室の開催を定期的に行っている。また滞在年数を経ると、彼女らの声を反映させるべく、地域づくりへの諸行事への参加や自治体職員研修での意見の発表など異文化交流に力を注いでいる。その結果、例えば韓国婦人による「キムチの販売」が収益を上げ、地域特産品となったという成果を得た。外国人婦人による母国の民話集の発行などが行われている。

その一方で毎年か国際結婚から生まれた子どもが小学校に毎年20人くらい入学する状況から、教室の国際化が緊急の課題となっている。各児童の個性の尊重や国際理解教育の有り方、日本語教育などの問題が噴出している。また外国人婦人にとっては、国際結婚当事者の死亡、離婚に伴う相続などの法的な問題が生じている。

4-4 農村部の国際結婚における高齢者介護（Fさんのケース）

【家族構成】

Fさん41歳、Fさんの夫53歳、こども11歳

姑【故人】86歳→昨年他界 舅（20年前他界）

Fさんの親類【フリッピン】

父【67歳】母【70歳】7人兄弟

夫の親類

長姉（東京）次姉（戸沢村）弟【酒田】

【結婚のいきさつ】

Fさんは、1989年9月に、夫とマニラのホテルで出会った。もうひとりの日本人男性と役場の人が行っていて、Fさんは知り合いから会って見ないかと誘われてお見合いをした。Fさん以外にフィリッピン女性がその時も一人の日本人とお見合いをした。

すぐに結婚を決めたわけではなく、2・3回マニラへ来て紹介した日本人の人が中に入って、日本に来て結婚式を挙げた。向こうではさようならパーティーをした。法律的な手続きはその時に中に入った日本人にすべてお任せした。最初は日本語もわからず、エージェンシーの人【マニラに住んでいる日本人】が、通訳をしてくれた。

【出産】

1990年11月に最初の女の子と出産した。日本にきて間もない時は言葉に一番不自由した。最初の子は帝王切開だった。4000グラムもあったし、しかも言葉が不自由だったので「痛い」とかいえなく辛かった。しかも「子ども」の心臓に障がいがあって、別な病棟に入って大変だった。自分も1ヶ月くらい入院して子どももその障がいのために1ヶ月検診の後、状態が悪くなって新庄から山形の病院まで救急車で運ばれた。1ヶ月ぐらい入院した。子どもの初めてのクリスマスは病院だった。現在子どもはパレーをしたりして元気だ。

【結婚後すぐの義母との交流】

おばあちゃんは、来てすぐ、日本の料理や習慣を知らないのに教えてくれなくて、流し台に材料置かれてこれを作れといわれていた。また座り方とか、家族が座る場所とか決まっているのに教えてくれなくて、お客さんが来ても上座と下座とわからなくて困った。日本に来て1週間ぐらいは家にいたけど、すぐ仕事に出て日本語の勉強をして子どもが生まれるまで仕事をして大変だった。親類との付き合いは家が離れているからそんなになかったし、自分も忙しかった。

姑は言ったことをしないといけないという厳しい人でした。自分が「あっちへ行っています」とかいっても、全然返事をしない。姑が黙っているのでもいいかわからない。私はあまりしゃべらないから、例えば夜帰ってきてご飯食べてすぐに部屋にいったお茶をして話しをしたりしない。

【主婦権】

フリッピンと決定的に違うのは、姑が家計をまかされていてお金のマネージメントをしているところ。全部お嫁さんのお給料も息子の給料も、お母さんにやってしまう。姑さんが、年をとるとお嫁さんにまかされる。わたしも、病気になる前に家計を任されていた。銀行とか大変だった。夫は1円も持っていない。お小遣いを毎日、コーヒー代とかタバコ代とかもらっているの、夫は家計のことは全然わからない。

【仕事と子育て】

今はレストランで仕事をしているが、この仕事は8年ぐらい続けている。早番だと、9時から5時45分、遅番だと11時15分から8時のシフトでしている。農業も以前は、田をしていたが、返してしまった。いまは、草むしりとか花を植えるだけ。子どもが幼稚園の時はおばあちゃんが面倒を見てくれていた。自分が送り迎えをしていたが、1年生からはひとりで留守番をしている。4年生くらいからは、家庭科が入ったからチャーハンとかカレーライスとか作ってくれる。携帯で電話すると何か作ってくれる。

収入は月収で12万から13万くらい、以前はボーナスがあったけれど、今はない。家は3年前に建てた。ローンは30年で組んでいる。夫は生コンクリート会社で運転手をしている。

【差別に関して】

子どもに関しては、「あなたのおかあさんフィリッピン人」とか言われる。戸沢村は一番大きな村なので、問題はすごくある。学校の先生が差別に対して何かいってくれるかはわからない。娘は学業では心配はないが、いじめは学校でたまにあるがそんなにひどくない。

自分も、今働いているレストランで差別にあった。忙しいときにお客さんがメモをよむように言われて、私はカタカナを忘れてしまって「私は日本人でないのわかりません」と答えると、「じゃ仕事をやめればいいじゃないですか」と言われた。日本人だって英語読めるかといわれたら読めないでしょう。なんでこんな差別をするのかと思った。仕事をする仲間からはなく、お客さんから差別を受けることが多い。

【姑の病歴】

子どもが小学校1年生の時、姑は脳梗塞になってそれは軽症で1ヶ月くらい入院して帰ってきた。仕事から帰ると姑の元気がなく、自分の娘に電話してくれていわれて、その日の夜歩けなくなってしまった。1ヶ月ぐらい病院に入っていて、家に帰って1ヶ月してまたリハビリもかねて病院に3ヶ月とか入院を繰り返していた。一人でトイレにいけなくなっていた。入院とリハビリのくりかえしだった。そして戸沢村のまごころ荘【特別養護老人ホーム】に入って3年したころ、胃がんになってしゃべらなくなってしまった。去年の2月に入院して5月に亡くなってしまった。

【介護に関して】

昼は、私（F）は仕事があるので夫の姉妹（姑の娘）が面倒みてくれていた。しかし仕事

から帰って夜は自分がほとんど介護していた。その後特別養護老人ホームに入り、帰ってきた時も、自宅に帰ってくると小学生の娘が姑と一緒に寝てくれて、ひとりでおしっこできないからポータブルトイレで、いつも娘がパンツあげたり、下げたり面倒をみていた。右半身が、麻痺したとき介護に認定は介護保険がスタートしていなかったので受けなかった。介護保険ができたときには、もう特別擁護老人ホームに入っていたから、お金の免除は関係なかった。特別養護老人ホームより、病院に入っていた時のほうが大変だった。下の世話はいくらなんでも小学生の娘にやらせられないので、おむつ交換したり、着替えしたりそれは大変だった。姑は55キロだったが、小さくみえるけれど太っていた。介護で一番つらかったのは、着替えだった。夫も家にいる時は世話をしてくれたが、昼間働いて、夜の介護は大変だった。

【普段の生活文化】

今は、フィリピン料理も作って夫も子どもも喜んでくれる。子どもは今は英語の塾に入っているが、中学校から英語がはじまれば英語を教えて上げられる。朝食や夕食は私 (F) が作り、ときどき夕食を娘が作る。宗教はカソリックだけど、家は仏教である。仏教のお墓には入りたくない。車は2台持っている。

【フィリピンの「親戚」と関係】

3年前に一度帰った。フィリピンのお父さんやお母さんにクリスマスには2万円くらい送る。フィリピンに帰りたけれど、娘の勉強が大変だから6年生だし娘が大変だから私も帰れない。娘はタガログ語をたまに話す。私は、教えていないから、びっくりする。フィリピンにつれていったらタガログ語を話す。1年生から3年生の時はフィリピンが好きといていた。2年前にFさんの妹でハワイに住んでいるところへ一人で言ってきた。初めの1週間は泣いていて、帰りたいたいと言っていたが、ハワイに慣れたら電話もとらない。アメリカ人の友達もできて馴染んだ。

【国籍の問題】

今は私 (F) は日本国籍になっている。こどもはフィリピンの国籍はもてないと思う。18歳か20歳になったら法務局に来てくださいと言われていた。フィリピンでは二重国籍は持てないと思う。私がこの間日本の国籍を取った時、「今、子どもさんは二つの国籍を持っているけれど、年齢に達したら選択にきてください」と言われている。今は私 (F) は日本国籍を取得して、たまに日本語しゃべっていても「あなた日本人でしょう」といわれることもあるが、「違いますよ。こころも体もフィリピン人だよ」と子どもには言っている。

【日本とフィリピンとの文化の違い】

ここは田舎だからか、夢がない。毎日仕事して家に帰って寝て、また仕事をしていうパターンでしょう。後は何も考えてない。夢がない。ここの人達は年でしょう。ずっとここを動かない。お金が少しあってもそのお金をどうやって大きくするか、田舎だから夢がな

いかもわからない。

子どもの育て方も違う。日本はちょっと甘い。おかあさんもおとうさんも甘い。フィリッピンは別居だからおばあちゃんやおじいちゃんは関係ない。夫婦のことだから。

日本では子どもが悪いことしてもおかあさんは笑って見ているみたい。フィリッピンですぐ叱る。私は「どこでも」叩く。ベットの上につぶせにしてたたく。

子どもには自立した女性になってほしい。大人になってどこにいても大丈夫なような。自分達のそばにいてほしいという気持ちはない。経済的にも精神的にも自立してほしい。

4-5 都市部インタビュー調査地域の特色

法務省による平成14年度在留外国人統計によると、日本人配偶者在留資格を持つ外国人登録者は、京都2,835人、大阪13,873人、兵庫6,232人、奈良1,442人に上る。先に紹介した山形が2,276人であることと比較すると、大阪では多くの国際結婚が行なわれているかのようと思われるが、この数字には朝鮮・韓国・中国からの永住者と日本人の国際結婚が含まれていることをみのがしてはならない。

都市部の国際結婚における介護の事例としてインタビューした奈良県と京都府の境に住むAは、奈良県のナラ・マブハイ・コミュニティーの一員である。奈良県は、多くの永住者やラテンアメリカからの外国人労働者が居住することから国際交流団体が102以上登録している。ナラ・マブハイ・コミュニティーは1991年に結成されたフィリッピン人の団体で、会員のほとんどは日本人と結婚したフィリッピン人女性である。月2回、教会に集まり子育てや近所づきあいなど日常の悩みを語り合ったり、母国の文化を紹介する活動をここ12年間継続してきた。在フィリッピン総領事館とも連絡をとりあって、日比間の渡航についてのフィリッピン側の法改正の情報やフィリッピンにおける災害援助、フィリッピン文化の紹介などを継続している。1999年、約300人いた会員は現在不況の影響もあって、84名と減少している。

4-6 都市部の国際結婚における高齢者介護（Aさんのケース）

【家族構成】

A（妻）37歳 夫（長男）38歳 長女12歳 長男7歳 姑72歳

夫の親類

兄弟はなし 姑の兄（98）従兄弟（京都）

妻の親類

父（64歳）母（70歳）11人兄弟

兄弟のうち2人は2回ほど来日して夫の会社で働いた

【結婚のいきさつ】

Aは結婚してもう12年くらいになる（1990年）。知り合ったきっかけは、主人がフィリッピンへ行きましたね。Aがホテルで働いていて、フロントにいました。Aに一目惚れをし

て何回もフィリッピンに来て結婚してくださいとプロポーズされた。結婚をする時、日本のお母さんと主人がフィリッピンに来てくれました。日本に来ることにはいろいろ不安がありました。言葉とか、しきたりとか。今住んでいるここは、京都といっても村に近い。Aはセブ島ちかくのボホールという外国人が多い観光地でしたから。私（A）は英語とビサイア語を話せますが日本語は話せませんでした。

【出産】

Aの妹が、フィリッピンから最初の長女出産の時に手伝いに来た。また弟も長男出産の時に手伝いに来た。夫がマネキンの工場をしているので、それで手伝っていた。

【姑の病歴】

おばあちゃんはずっと肝硬変でした。10年以上病院ばかり行っていた。でも旅行はたびたび行っていた。平成12年の12月、私（A）と一緒にフィリッピンへ旅行に行ってお正月に帰ってきて1月は大丈夫だったけれど、2月からだんだん病気になるって、3月の中には寝たままになって、平成13年5月に亡くなりました。2ヶ月くらい寝込まれました。

1月に旅行に行ったときは、癌だともう家族はわかっていました。だれも病気については本人には言いませんでした。

【介護について】

3月から2ヶ月くらい寝込まれたのですが、もう起きていいのか、寝ているのかわからないような状態になってしまいました。自分で食べ物もあんまり食べられないので、もどしたりしていました。何がたべられるのかといつも思っていました。いつも私（A）がお世話していました。主人は全然お世話の仕方がわからない。姑は、入院はほとんどしないで家で2ヶ月くらい看病しました。時々夜中に起こしてお医者さんに連れて行ったり注射をしにいったりしていました。

介護保険はそのときは使わなかったです。（知らなかった）。私（A）ひとりで大変でした。私は仕事をしています。近いところで働いているので、お昼に帰ってお世話してまた働きに行っていました。主人は工場で働いていましたので、昼の間は主人が見ていました。夜とお昼休みは私です。

夜が大変でした。おしめを替えて、そのときが大変でした。背中もいたくなりました。自分の力がないので体を起こしたり、体を拭いて、食事を食べさせるのが大変でした。ご飯は、元気な時は姑が教えてくれたけれど、すべて日本式です。姑の体が弱ってからは自分でやっていました。

【日本におけるフィリッピンの友達】

日曜日にカトリック教会のミサがあるから、そこで同郷の友達と会っていろいろ教えてもらいました。ストレスを発散させてくれます。

【一番大変だった時】

子どもが生まれた時が大変でした。24歳、13年前。また冬は寒いことも辛かったです。隣の病院で産みました。厳しい先生で太ってはダメだといわれました。私（A）は入院させられました。太ってはダメということで。ラマーズ法も採用してなくて、主人は生まれるときに手を握ってくれるということもありませんでした。痛い、痛いといっても誰も助けてくれない。大変だなと思いました。日本はみんなこの出産の仕方なのですか。フィリピンでは横にいてさすってくれたりします。サポートもないし、日本の出産では自由がありません。何にも言ってくれなかったです。

【子どもの教育】

私（A）はひらがなはだいたい読めるけど、漢字はあまり読めないのです。主人が宿題する時はだいたい子ども達を教えてください。長女は小学6年生だけれど、私立はお金がかかるので受験させません。娘の教育で悩むことはありません。しかし下の長男は学校の先生から電話がかかってくる。怠け者といわれました。集中力が無いといわれました。保育園から遊んでばかりいる子だから。先生に「小さい時にちゃんと書けることを教えてあげてください」と言われました。先生は40歳くらいですが、子どもの勉強のことがいつも不満みたいです。厳しい先生みたいです。

【家業】

主人の仕事は、不景気でマネキンの仕事はやめました。今は主人は暇です。不景気であまり注文がないので、工場の収入は入らないけれど、この前に立つ古い家の家賃とこの工場ともう一つの家の家賃収入、駐車場の収入があります。マネキン工場をやめたのは、平成13年のお母さんが死ぬ前です。主人は私（A）の実家（フィリピン）で新しい仕事を考えています。子どもの学校があるので、私（A）は日本にいて主人と一緒にフィリピンへ新しい仕事探しに行けません。

【日本の文化とフィリピンの文化の違い】

日本は自由が少ないです。日本の風習、特におじいさんやおばあさんがしきたりにうるさい。日本式の食べ方で食べなさいとか、私（A）の自由に本当はしたかったのだけど、おばあちゃんに厳しくしつけられました。日本のやり方は、ご飯と炊くと必ず、神さんと仏さんにお供えするとか。お雑煮やおそばなどの季節の行事もおばあちゃんは厳しかった。自分の好きな時間に好きなやり方で掃除したいと思ったけれど、できなかつたりした。喧嘩もちょっとあったけど、後から仲良くなった。

近所関係もフィリピンでは仲がよかった。例えば一軒がご飯をたくさん作ったら、呼びにきて一緒に食べるようなことをしていました。

【夫婦と嫁・姑関係】

夫婦喧嘩もあるけど、後からまたお母さんと私が喧嘩になつたりして大変だった。同居に

ついて、自分は、あまりよく思っていなかった。別に住んだ方がうまくいくと思う。おばあちゃんと孫は仲良しでした。お母さんが家を持っていて守っているから同居は仕方がない。離れられない。夫には満足とは、いえない。私(A)が子どものために我慢している。

うちは、私(A)が家計を切り盛りしています。子どもの洋服とか、何がいるとか主人に頼んでお金をもらうことはない。食費だけ現金で、電気、水、電話は自分の通帳から出している。家計管理については、問題はあまりない。

心配なのは、主人が病院に行くばかりで健康状態が悪い。もしなにかあったら、子どもの世話を誰がしてくれる？だからそんな時はフィリッピンへ兄弟を呼びに行きたいと思う。

【近所関係】

時々挨拶しているけれども、こっちも向こうも気を使う。でも問題はない。自分は自分という近所関係だから。

【差別について】

私(A)は3人の外国人と一緒に仕事をしています。最初は私が一人で働いていて、その後の外国人(二人フィリッピン人、一人インド人)に紹介してあげた。外国人(インド人)が失敗したら、いっぱい文句を言うてくる。この人は、意地が悪い。日本人の場合はそういわれない。社長やオーナーはそう厳しく私に言わない。

【フィリッピンの親戚との関係】

楽しみにしているのはフィリッピンに帰ることです。フィリッピンの母にはプレゼントをしています。お母さんだけです。兄弟は自分で生活をしているしあんまりいらぬ。今年だからお母さんだけに送っています。私は親戚とか兄弟の娘とかを呼びたい。なにかのときに困るし、家のことでしんどい時にだれも助けてくれない。近所と親戚がいぬから。ビザの問題で呼べない。

【仕事について】

今の仕事は、朝7時45分から仕事に行って12時まで働き、1時から5時までです。私はそれで10万円もらっています。その前は大阪のフィリッピンの銀行で働いていてお母さんに子どもをみてもらっていました。お母さんがちょっと気にいらなかったみたいでした。子どもをほったらかして、働いていましたから。朝から晩までの仕事で子どもが可哀想だったからやめました。仕事がこのところ近くにもないので大変です。日本の料理の勉強もして、ホームヘルパーの勉強がしたいです。

4-7 都市部の日本人家族の高齢者介護 (Kのケース)

【家族構成】

K(妻)55歳 夫(長男)58歳 娘20歳 姑81歳

夫の親類

長女55歳、次女54歳 次男52歳 三男48歳(近所にみんな居住している)

妻の親類

母83歳（徘徊症状でグループホームに入居中） 弟52歳（神戸に住んでいたが、地震で半壊し娘のところへ一時同居していたが、現在はホーム）

【家族の同居経歴】

結婚してすぐは一番下の弟（三男）と同居していた。次男はすぐ近くの家を借りてすんでいて、会社帰りには5時半に必ず「お母さんどう？」と毎日きていた。食べることやいろんなこと指示されて、主人は何もそういう状態に言ってくれなかった。その弟と喧嘩ばかりしていた。子どもがなかなかできなくて「そろそろ実家に帰ろうか」とも思ったこともあった。そうすると妊娠した。三男は賢いから何も言わなかった。見て見ぬふりをしていた。この三男は次男と一緒に住むとマンションを買ってもらったのですが、次男の性格と三男の性格はあわないので、三男は私たちと4年から5年同居していた。

【姑の病歴】

脳血栓で、56歳で倒れて闘病歴が25年になる。現在介護度は5で、介護保険を満額使っている。

おばあちゃんは私（K）の結婚の結納が入ってから倒れた。私の結婚が遅くて30くらいに主人とお見合いとしてお母さんはしっかりしていたので「別居」と思っていた。結納も結婚式場も決まってしまうと思っていたらいつのまにか嫁にきていた。私（K）が病院へ行った時。集中治療室で「もうだめや」と言われていた。それが持ち直して、妹がすごいリハビリをして、持てないお箸も持てるようになった。しかし最初は兄弟は不安だから次々と私の家へ見舞いにきていた。

娘が3歳時から小学校4年まで保険の外交員（社員）として、勤めにでておりおばあちゃんも元気だった。しかしおばあちゃんがまた倒れて入院して仕事をやめざるをえなくなった。あのころ、年寄りには付き添いをしなくてはいけない病院だった。足が動かなくなったのは、複雑骨折をして手術したからです。しかし術後、病院がほったらかしにして歩けなくなった。医師に責任とってと言ったのですが、「本人の歩く意思がないと、『いやいや』歩かせたらこちら（病院側）の責任になる」と言われた。それまでは手をとってトイレへ連れて行って紙のパンツおろしたらそれですんだのに、それからはダメです。歩く足を踏ん張らせて、組あわせてというようにしていると「やー怖い」という声を聞いただけで、私がすごいことやっているように誤解されます。複雑骨折する前は、朝昼晩と毎日リハビリしていたようです。骨折前は、自分なりに朝、昼、晩と、前かがみでも歩いていました。骨折後、「治療」したら、ずいぶんよくなるのと言っても、「もういい」とおばあちゃんは言う。

励ますというこのか、私が病人の立場だったら、難しいところがありますね。奇声をあげられたりして、良いことしているのに近所から見ると「悪い嫁」ということになるでしょう。近所の人は分からないから「いじめてるのじゃないか」というように見える。

複雑骨折が一段落して退院してまた歩けるようになってすぐ家の前のパートに5年ぐらい行ってました。しかしおばあちゃん健康状態が悪くなってやめてしまいました。年寄りに束縛されます。

【実の母親との関係】

阪神大震災の時、私（K）の母親が避難して夫の母親と同居していました。私は9時から4時までパートにいていました。私の母は年上だったけれど元気だった。私の母に全部おばあちゃんのことを頼んで働いていました、「3時になったらおトイレね」と言っても、おばあちゃんは「人にみられたら恥ずかしい」と言って勝手にそのころは行っていました。私の母が「おばあちゃんトイレに行ってきたら」と声をかけたら、「今はできません」というので、言ったら遠慮すると思って、ある程度たってからトイレに行くふりをして「トイレ行ってきますね」といって促したら、暫くたったらおばあちゃんは行ってくれたりした。

私の母にはずっといてほしかったのだけれど、夫に気を使いますのでそれはできなかった。あの頃はほんとうに楽でした。パート先が家の前だったので3時の時に帰ってきて、「おトイレ行ってきて」と指示を出していました。年寄りには年寄りの気持ちがわかりますから。食事もおの母親に作ってもらって、私の母と夫の母二人で食べたりしていました。

【介護に関して】

56歳から倒れたので、介護のない時代からおしめをしていた。最初のころ【新婚時代に倒れたので】地獄と思った。家を出たいと思っても介護がある。デイサービスは以前から利用していた。デイサービスに行っているとき、ショートステイのことも知って複数に登録してどこか空いているところがあれば、泊まれる。結構長いこと入所していた。社会福祉協議会などで手続きをしていた。長い間利用しているので、今でも結構無理を聞いてもらえる。3月も15日ほどショートステイができた。

おばあちゃんの娘が2人いる。長女は内職を家でしているし、次女は朝から晩まで社員で働いているので、母親の介護は難しい。自分しか専業主婦はいないから介護を引き受けているが、ショートステイが難しい時は、「お休みいつ？」と次女に聞いて二つ返事で引き受けてもらっている。「ちょっと親孝行しといて」と言って。しかしお嫁さんは頼みにくい。歳が私（K）とそうかわらないし、すごくしんどいらしい。一人は子どもがいない夫婦なんだけど、夫の弟がわがままでいつも家にいてほしいらしい。三男のお嫁さんはヘルパーもって仕事をしているけれど会社に無理はいえないので休めない。自分としたり、資格もって働いているヘルパーの三男の嫁さんをお願いしたいが、三男のお嫁さんは母親の介護はストレスがたまるらしい。自分と一緒に介護したいようだけど、用事があって外にでるので、そうはできない。趣味で出ているように思われているから…。介護した次の日は三男の嫁は姑の長女に愚痴をこぼしに行く。「おばあちゃんこうやった」とか「お義姉さんは家に帰るといって、7時に帰ってきたとかね。そやからそんなことを聞くのが嫌だか

ら、(嫁さんより)娘くらいのほうがいいのか、お金払って介護しているのが一番いいと思った。誰にも気兼ねがいらぬから。娘さんにも家庭があるから、お義母さんをお願いするのはと思っているけど、昔は義母が自分から歩いて娘さんのところへ行っていた。やはり娘さんがいいみたいで、「もうクシャクシャになって喜んで」そして「娘にはすごくいいところをみせる」。嫁は毎日のことだから「介護して当たり前」みたい。娘さんがくるとオシメ交換での「見栄を張る」というか、「元気でいるということを見せようとする」。盆の正月にはみんな集まることになっているので、娘さんのところのお子さんも集まる。ひ孫もいる。

私(K)は私の娘に愚痴もこぼすのですが、私の介護を見てないようで見ています。デイサービスへ行く期間つまりお休みの期間がなかったので、疲れたといたら、娘が明日代わってあげるといってくれました。娘が若いうちがおばちゃん世話のかまわなくていいからといっています。自分が若いうちから介護しているので、この家はおばあちゃんの家やからおばあちゃん大事にしなければあかんといったら、なんぼでも、「家」の子はしてくれます。生まれたときからおばあちゃんがいるから。途中から同居したところは子どもも無視してあんまり仲がよくないみたいです。しかしおばあちゃんは脳血栓だったし、娘を抱いたことはないのです。ただ一緒にだんだん大きくなって、一緒にご飯食べたりして仲よくしてきました。お友達みたいに。親に怒られても助けてくれるのはおばあちゃんでしたから。

介護保険は介護度5で36万円の1割負担で3万6千円です。しかし、介護人が熱かだったり、風邪引いていてもおしめなどかえなくてはならないものはかえなくてはいけぬから、特別養護に入った方がと思うこともあります。長い間介護をしていると、自分(K)の頭が変になると思うことがある。ほっておいても、まめにしても全部介護はわたしで(K)が熱でているからしんどいという、ちょっとの時間は来てくれるけど、オムツを夜中かえるのは私ですから。特別養護に入ったほうが、綿密に介護してくれるし、いいのと違うかと思えます。

食事も手がかかります。私たちの食べるものを刻んで、もう一度炊いてやわらかくしてそして与える。ご飯はお粥ですし、すごく手がかかります。だからショートステイの時は外出できます。「今度何日がショートステイ」というのを励みに毎日介護しているようなものです。

介護保険で助かったというのは、5番になってからです。3番とか4番とかは絶対に4はダメ。介護保険始まった時は、3番でした。あのころは、服も作れるし、名前も言うことができました。生年月日や住所も言えました。今は名前ぐらいです。介護保険ができて最初の時は3番でしたから却って不便でした。3、4はおもいっきりショートステイが使えないからストレスたまるばかりでした。

夏場に床ずれの一步手前の「水泡」ができました。自分の親だったらどうもないと思うのですが、やっぱり主人の親だから。介護に関しては、主人は何もいいません。主人は何も言わないけれどやっぱり女兄弟が来ますと、おむつをかえてくれます。私（K）の他のお嫁さんは言わなかったら何もしません。妹らがきたら言わなくてもおむつをかえてくれますので水泡がわかります。

ちょっと手をぬいてさぼったら「水泡」はすぐできます。主人に相談しました。主人は朝が早いから1番に起きたら一番最初におむつをかえてもらって30分も早くおしめをかえたら違う。水泡はできない。主人に「頼むからおむつ交換して」というたらやってもらってました。夏場から12月まで会社に行く前に、講習もしてないのににおむつをきれいに交換してくれる。しかし、初めて12月に主人は「もういや！いつまで続くの？」ときた。ずっとやっていて精神的苦痛が大きかったらしい。私は、「ちょっと待って。いったい誰の親なの？」といった。主人は「いや僕のおかあさんやけれど、やってみてこれは女の仕事やと思った。」と言う。わたしは頭にきて「じゃあわたしはどうなるの？」と聞くと、「女の仕事やろ」っていうのです。

そうこうしているうちに主人に「ホームに申し込んでくれないか」と言われた。介護し始めて25年たつけど、ショートステイで入ってもずっと特老に滞在はできない。近所の人親をいれても、嫁から「入って」とは言えない。手に負えなくなったらいいと思っていたけれど、兄弟のうち誰かが言ってくれたら「そうですか」とホームに入れる。嫁だから言えない。嫁だから言えないというところはあるが、今では妹に特老に入所するかどうか相談できる。

主人が「ホームに入れる」といっているけれど、「どう思う？自分の親を捨てるのといっしょと違う？」と妹に聞いたら、「お兄さんがそんなに言うのだったら仕方がないわ」と言っていて「申し込んだいたら」と言われた。うちの家は長女が一番権限がある。年齢的には主人が上だけれど、主人は全然ダメです。

ホームに一応申し込みはしているが、いっぱいなので入れない。介護歴が長いから、ホームに優先的に一時入所させてくれようとするが、何度かお断りしている。主人は入ったらよいのというが、おばあちゃんは環境の変化に左右されるから施設入所はしんどいと思って今はホームヘルパーさん2人に朝8時からきてもらっている。わたしも介護の愚痴をこぼせるし、介護のコツ「こういうとき、重たいけどどのようにもてる？」と聞く。

おばあちゃんは、ホームに申し込みをしているのは知らない。落ち込みますから。それは主人の口から言うことだと思う。ショートステイは行っている、いつかは帰るから…。デイサービスに行くのとショートステイに行くのではおばあちゃんの顔が違う。ショートステイはどうしても家に事前に来て体温測って、血圧測って、前触れでおばあちゃんには分かる。不安な顔している。デイはその日に行ってその日に帰ってくるからニコニコし

ている。

しかしそのデイも最初に行く時は、私が言っても「嫌、嫌」の一点張り。「結構です」と言っていました。毎月1回保健婦さんがケアの訪問に来てくださって、「デイ行ったら」といっても「結構です」と突き放すように言う。それで長女に言ってもらったらすぐ「行く」と言った。やはり嫁は他人やから。家族はお風呂に入れるのが大変やからもうデイに行くのが極楽なのです。おばあちゃんが家にいるのは苦痛じゃないのです。何もいわないおばあちゃんだから。テレビつけといたら観ている。ただお風呂とかを嫌がる。足をすべらして複雑骨折でもしたらと思うので家のお風呂に入れるのはこちら怖いです。

最初はやっぱり「嫁の立場だから、ついつい言いたいことを言わん」と我慢してきたから、ここまで来たらもう20何年一緒に暮らしてきたから、もう言わなくてはいけないと思っています。

【親類（兄弟）の介護に対する考え方】

次男や三男は口だけ言って何もしない。特に次男はへんこつだから、「今日何食べた？」とおばあちゃんに聞いて、「年寄りに必要なものは一切食べてない」ってすごく切れます。まず「牛乳飲んでない」ですね。おばあちゃんきらいなのに。お嫁にきたころは次男にずいぶんいじめられた。次男はお母さんにべったりやったけれど…おしめ一つ変えたことがない。主人が替えるようになって次男に「換えて」とたのんでも、「お母さん恥ずかしがる」という。口ばかりうるさくってちっとも行動にでない。そのくせ、「私にビデオ見ておいてください。勉強してくださいね」という。もうひとりの三男はとても柔らかな人です。その三男におばあちゃんをみてもらったらと思って言うと、「お母さんは兄貴のところに住んでいるのが一番よい」といわれた。それで終わり。嫁さんにしたら結局にみんな逃げているということになる

【孫とおばあちゃんの関係】

同居している娘（孫）は、ヘルパーの2級をとりました。だから介護のコツがわかっている。「便」がでてないと言ったら、おまるに座らせてくれる。ほんとうに助かっています。兄弟のいない子だから、「娘にとっておばあちゃんがいてよかった」と今になって思います。生まれたときからおばあちゃんが不自由だったからそういう姿と見て育てるので、理解がある。一方私の娘にとっては、実家の母は指示を与えるので、怖いおばあちゃんという感じですか。すごく遠慮がちというか寂しいです。

主人の妹の孫はおばあちゃんが元気な時に育てた孫なので、モノをもらったりすると喜んで泣きます。うちの娘も修学旅行でもみじ饅頭をあげたが、ちょっと喜び方の度合いが違う。「寂しいなー」と思います。感激の度合いが違います。初孫（長女の長男）が一番かわいいみたい。

【一番辛かった時】

一番大変だった時は結婚した当初でした。おばあちゃんが病気ということで、子どももかなり犠牲になっています。長期の旅行にはいけないので、出来事の絵日記が書けない。子どもはいつも同じことばかり書くのは嫌という。どうしても行きたいというので、おばあちゃんと一緒にいくから、おばちゃんの面倒見てと言っておばあちゃんも入れて、3回ぐらい行った。

【相談できる人】

夫の妹（長女）には相談できます。友達もたくさんいるけれど、愚痴をこぼすだけ。相談は友達にはできません。うちのようなおばあちゃんを看てる人がいないから。自分の肉体を投資していないから、友達はストレスがたまらない。

【自分の介護についてのKの考え】

私は一人娘しかいないが、歳をとったら別居したい。うちのおばあちゃんは不自由だったから別居できなかった。一度は「別居」をしてみたかったと思うので…おばあちゃんはおばあちゃんの「姑」を養老院に入れたみたいです。その姑さんも痴呆がひどくて田舎に住めなくなって、今のおばあちゃんが、うちの近所のホームに入れたらいい。義妹が言っていました。

【外国人による介護についての考え】

外国人の人が老人ホームで働いているのを観て「いいなー」と思いました。色の黒い男の方でした。介護が始まる前、病院から男の人がきて、お風呂入れてもらえた。若い男の人でしたが、却って気兼ねしなかったみたいでした。その時に注意されたこともよく聞きました。男の人に好かれたいという気持ちがあるのでしょうか。おばあちゃんは、美容院へ行って帰ってきて、主人に誉めてあげてとあって、主人が「きれいになって。別嬪になって」というとすごく喜びます。だから私が言うより、主人が言うほうが聞くようです。長男がすごくかわいいし、一番初めにできた子どもだから。母の愛情や女としての気持ちもありますから。

テレビを見ていたら、全然言葉の通じない人でも、意外とやさしい人にみえました。私は、外国人はどんどん介護に入ってもらえばいいと思います。しかしヘルパーというのは抵抗を感じます。やはり怖いもので。国が違ふと実際にもそうですが、友達がいたって、目が違います。目がちょっと暗いかなという感じがします。そういうのを疑ってはいけなけれど、家に入って、ホームヘルパーという資格でくるなら、私はもしかしたら反対するかも分からない。施設やホームで働いてもらうには安心です。私一人がいる時に入ってくるのはなんか怖い。意外と「人」が変わってなんとなかったりする。今は集団で入ってきて犯罪を行うというケースもある。子どもには「絶対戸を空けたらあかん」と言っ

います。うちは孤立した状態で住んでいますから。

4-8 日本人家族と国際結婚家族の高齢者介護比較分析

高齢者介護に至るまでの家族の歴史がどのように積み上げられてきたかという縦断的分析と高齢者介護に携わっている時の周囲の社会的・文化的状況に焦点を当てた横断的分析を両面から分析を行なう。

【高齢者介護と家族のライフコース】

今回、インタビューした農村部と都市部の国際家族は、最初の子どもは同じ年齢で、しかも妻の年齢も41歳と37歳と比較的近い。しかしながら農村部の方の夫は53才、都市部の夫は38歳と大きな年齢差がある。この年齢の開きは、個人的な事情よりも、農村部の国際結婚と都市部の国際結婚のあり方が大きく異なることを意味している。出稼ぎや農業を嫌う日本の女性が多いことから結婚年齢が遅くなりフィリピンでの見合いという形で結婚した農村部のケースは、個人の選択によって配偶者を自由に選んだというより限られた状況に追いこまれてその家族の状況に適応してくれる配偶者選択をしたと行っていいだろう。

一方、フィリピンの観光地で知り合って何度も交際の後に恋愛結婚をしたAのケースは、妻方の家族と、夫方の家族との交流も頻繁である。出会いの機会のグローバル化が国際結婚という形になったと言える。すなわちFのケースは家族の影響の強い結婚をし、Aのケースは個人の選択性の強い結婚と言える。

その後の出産、子育てでもフィリピンと日本の文化差に戸惑う両者の姿が見られる。例えばFもAも来日後すぐの妊娠・出産で日本とフィリピンの出産に対する方法の違いを体験する。FもAも「痛い」といっても言葉が通じないこと、夫が傍についてお産ができなかったことをショックと感じている。家族全員で出産を応援するフィリピンのお産の仕方と日本の病院にまかせた管理されたお産に仕方との違いが、「出産」というライフイベントの中で彼女達のところに深く刻みつけられている。

また、来日してすぐの家事でも姑の日本式家事の方法に戸惑う姿がみられる。例えばFの「来てすぐ、日本の料理や習慣を知らないのに、教えてくれない」という嘆きやAの「日本式の食べ方で食べなさい」とか「食前に神仏にお供えする習慣や掃除の方法を押し付けられた」という印象は、短期間で日本の「嫁」にしようとする日本の家族の側の意図がみられる。

その後の「子育て」においても、仕事をもって共働きとしているFやAに代わって昼間は、姑が「子育て」を代行する。ひらがなや漢字の教育は日本人である夫や姑が教えることになり、子どもの教育は日本式に適応することになるのだが、その一方で自らのルーツであるフィリピン文化がなござりにされていくことに、危機感をいだく姿も見られる。Fは小さい子どもに甘い日本のしつけに疑問を感じているが、姑の手前、自分流を主張することはできない。またAも、日本の学校教育になれない息子にいらだつ教師に対して、家庭に

二つの文化が存在し。将来フィリッピンに移動する可能性もあることを説明して理解を求めたいが、機会を持ってないでいる。

結婚してすぐの「出産」、日本での「共働きしながらの子育て」そして「子育て終了直後の介護」と、日本人女性でもこれほど短期間の内に進行しないであろうと思われるライフコースの急劇な変化は、彼女達に急速な「日本文化への適応」を要請した。そのような変化をのりきることができた彼女達の一番の味方は、「子ども達」であった。おばあちゃんである「姑」に育てられ、お母さんとの間にたって、情緒的なシグニフィカントパーソンとしてコミュニケーションをつないでいる姿が、見られる。それに引き換え、もっとも彼女達のシグニフィカントパーソンとして機能しなければならない夫達の影は薄い。

姑の介護の場でも、妻に介護を任せている夫の姿がみられる。夫の姉妹が登場はしても、共働きにもかかわらず夜は妻に介護を任せきりの状態であった。そんな時、姑と寝起きを共にしてきた子ども（娘）は、オムツ交換や着替えにと小学生でありながらFやAの強力なサポーターであった。またそれまで厳しく家事を取り締まってきた姑は、体力の衰えとともに、主婦権（特に家計管理権）を外国人である妻に譲渡する動きも農村部に生きるFにおいてはみられた。

姑の闘病時、Fは、特別養護老人ホームを利用しているが「介護保険」の存在は知らなかった。またAの姑は入院ではなく在宅による看護を選んだが、訪問看護やその他の公共サービスについての知識の提供は、なかった。国際結婚した二つの家族は、不況の影響を受けて共働きを継続しているが生活は余裕のあるものではない。しかし、来日してから12年になり、日本語も自由に使える文化にも慣れてきたにもかかわらず、日本には今後留まりたいという気持ちは薄い。その理由を、Fは「夢がない」と表わしている。Fは日本に帰化までしたが、「心も体もフィリッピン人です」と言いきっている。またAは今後「フィリッピンで新しい事業をしたい」と日本から移動していく意向をもらしている。

子ども達の将来についても、Fは「ここを私達は動けないかわからないが、娘は自立した女性になって精神的にも、経済的にも自立してほしい」と希望を述べている。またAは、将来の移動も見越して子どもの教育を考えている。

【介護をめぐる多文化共生に向けて】

日本人家族の高齢者介護のインタビュー結果要約と、フィリッピン女性が妻になった国際家族の介護のインタビュー結果を文化比較してみよう。

「女性専従の介護」という点では、山形の国際結婚家族も、京都の国際結婚家族も、大阪の日本人家族も変わらない。すなわち「ジェンダー」的価値観が介護に関してはまだまだ支配的である。「結婚」→「家の嫁」→「内孫と祖母」といった近代家族の家をめぐる価値観は、妻を外国から迎えようと、日本人であろうと変わりはない。また介護をサポートする人的資源も役割期待されるのはほとんど女性である。近くに住む夫の姉・妹、そして

次なる介護の予備軍として期待される娘と、ジェンダー的価値観の再生が図られている。

一見国際結婚という、グローバルな配偶者選択から始まった結婚ではあるが、出産や育児、子育て、介護にともなう価値観に個人の自由な選択は入り込む余地はない。くしくもこの3者の比較をしてみれば、最後にインタビュー報告をのせた日本人家族の「介護事例」は、典型的な嫁の一生を表わしている。彼女はインタビューを終えた後、結婚して以来25年近くに渡る介護の期間を振り返って、「自分の人生は介護で終わるのか」と介護をしながら今は体の不自由な姑の顔に涙が落ちて仕方がないと言われた。兄弟がたくさんいるにもかかわらず、長男であるがゆえの「介護」、そこには押さえつけられた社会的規範が目に見えぬ形で彼女を束縛している。

外国人妻であったFやAは、このような価値観で幼少時に社会化されていないばかりか、数多くの兄弟や親密な近所関係の中で介護をするということが当たり前であった。それは出産にしてもそうである。農村部のFは、「お母さんはあのような介護でしあわせだったのだろうか」と姑の立場から日本式の介護に疑問をはさんでいる。「在宅介護」という言葉は「家族全員のあたたかい雰囲気の中で介護」というイメージを連想させるが、インタビューで描き出された「在宅介護」の日本文化は、「長男の嫁が一人で、姑の介護をせざるを得ない文化」と言える。そしてそれは介護者のみならず、被介護者もその日本式介護文化の犠牲となっているのではないだろうか。

「息子の嫁の介護」にこだわるがあまり、息子の結婚、後継ぎの誕生を望み、嫁を日本文化に適応させることに苦心してきた姑が介護を受ける側になった時、ほんとうに心通わせる介護の受けることになったかという疑問を感じる。それは日本とフィリピンの文化の差が原因というより、日本の「周囲」を気にするあまり、ほんとうに「家族」にとって大事な選択ができないでいること自体が原因であると思われる。もちろん「家」文化の残存としての旧式の価値観の影響もあるであろう。しかし今回の事例調査で明らかになったのは、国際家族としての独自の家族観の形成が「介護」にも見られるかと言うとその答えは「否」である。結婚直後からの「日本式の風習」への同化が求められ、個人の自由な考えが抑圧されている状況からは、国際家族としての新しい価値観は生まれ難い。外国人である妻の国の文化を否定し、母国への里帰りが自由にできない環境は、表面的には日本文化に同化したかのように見えるが、Fの言葉のように「心はフィリピン人」であり、以前は抱いていた「日本文化」への興味の目も摘みかねない。

「介護」は、ひとつの家族の文化である。どのような介護を家族が選択するか、その選択の過程に被介護者、介護者のコミュニケーションがいかにとられたか、そして家族全員がそれにどのように関わったか。そのことが大事なのではないだろうか。介護保険が始まり、介護が公共の手に委ねられたわけでも、また民間サービスが参入することによって介護がビジネスとして「お金」の問題となったわけでもない。家族の中で「介護」の話題が

もっと表面に出て、個人の価値観がぶつかり合ってこそ、少子高齢化にふさわしい「介護文化」が育っていくのではないだろうか。

今回の調査は「国際結婚」をした家族、すなわち異なる文化を持った個人が国際結婚によって家族を形成した時、「介護」にかかわる文化がどのように形成されるかを、量的、質的に検証することを目的とした。しかし結果としてインタビュー結果から得られたのは、国際家族といえども、日本文化に同化させられた介護者と被介護者の姿だった。今後はさらにインタビュー調査の事例を得て、国際家族の介護の姿から見えてくる日本の「介護文化」を明かにしたい。本研究は、平成14年度相愛大学・相愛女子短期大学学術研究助成を受けて実施した。

参考文献

- ・厚生労働省大臣官房統計情報局、2001、『平成12年版国民生活基礎調査概況』
- ・総務省統計局、2001、『平成12年国勢調査』
- ・最上広域市町村事務組合、2002、『平成13年度国際交流センター概要』
- ・財団法人なら・シルクロード博記念国際交流財団、2001、『奈良県の国際活動団体』